ちの食と農を守る～
み換えのない
わざして

グリーンコープでは、遺伝子組み換え（GM）食品に関して、人や環境に与える計り知れない影響を危惧し、同じ考えを持つ団体と連帯して、「遺伝子組み換え食品いらない！キャンペーン」と共に反対運動を続けています。

２０１０年11月30日、宮崎大学でのGM綿の試験栽培に関して、グリーンコープ生協みやざき／※1ストップGMO宮崎連絡会による「詳しく知ろう！遺伝子組み換え作物」集会が宮崎市で開催されました。みやざきの組合員はじめ、１５９人が参加しました。

２０１０年12月14日には、「食と農から生物多様性を考える市民ネットワーク」（MOP5市民ネット）主催による「遺伝子組み換え生物をめぐる国際会議報告集会」が東京都で開催されました。２０１０年10月に名古屋市で開かれた「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）／カルタヘナ議定書第５回締約国会議（MOP5）での成果と課題についての報告がありました。約90人（グリーンコープからは組合員など10人）が参加しました。

宮崎大学の「GM綿の実験栽培」に反対します
詳しく知ろう！遺伝子組み換え作物
２０１０年11月30日

開会にあたって宮崎県綾町の前田穣町長から「GM作物は作らない」とのメッセージが届けられ、綾豚会・綾菜会のメンバーなど参加者全員が思いを一つにする集会になった。天笠啓祐さんの講演ではGMの現状と問題点など最新の情報が分かりやすく説明された。

講演要旨

GM作物とは？

生物が長い進化の過程を経て形成してきた生態系の中での住みわけと、共存のために不可欠な要素が「種の壁」だ。GM技術が品種改良と決定的に違うのは、種の壁を越えて遺伝子のやり取りがされることだ。人の手によって操作され導入された遺伝子は、異なる種の中ではうまく働けないため無理やりに強化される。ある種の植物を枯らす除草剤に対して耐性を持つ作物や殺虫能力を持つ作物など、自然界では生まれようのない生物がGM技術によって次々と生み出されている。

組合員によるアピール

天笠啓祐さん
市民バイオテクノロジー情報室代表。ジャーナリストとして原子力発電、遺伝子操作食品、電磁波など科学技術と社会の関係について積極的な発言を続けている

日本の現実

日本はGM作物の非栽培国でありながら世界最大の輸入国であり消費国だ。トウモロコシは94％をアメリカからの輸入に頼っているが、アメリカでは全体の作付面積の74％をGMトウモロコシが占めている。綿実は93％がオーストラリアからの輸入で、その作付面積の87％がGM綿だ。欧州では食品表示がしっかりしているためGM食品が流通しないが、日本は食品表示があいまいなため混入率や飼料の表示などが分かりにくい。消費者も知らないうちにGM食品を口にしてしまっているのが現実だ。

今、起きていること

今回、宮崎大学で実験栽培されているのがGM綿。綿は繊維としてだけではなく綿実油として食卓に上り、さらには家畜の飼料にも使われている。綿の世界三大栽培国であるアメリカ・インド・中国をはじめ、世界で1億４０００万と言われる栽培農家のほとんどが既にGM綿を栽培している。

そして今、GM作物栽培国では、さまざまな問題が目立ちはじめた。とくに顕著なのが除草剤の使用量の増加だ。除草剤耐性のGM作物の畑には、耐性の雑草がはびこっている。殺虫性GM作物についても、その耐性を持つ新たな害虫が増えたことに伴い、農薬の使用量が増え続けている。インドでは、GM綿を収穫した後の土地に放牧した羊やヤギが大量死したとの報告もある。周辺の生態系さえ変えてしまうGM作物が、栽培農家に経済的な損失をも与えはじめている。

生態系への影響についての懸念

まもなくアメリカではGM鮭がFDA（米国食品医薬品局）により承認される予定だ。野生の鮭に比べると最大で25倍の体重になるGM鮭。繁殖不能にしてはあるが成長スピードが早く巨大で獰猛だ。このGM鮭がもし自然界に逃げ出せば、魚類全体の生育環境に悪影響を及ぼす可能性がある。さらにアメリカで生産・流通がはじまれば、切り身や缶詰などに加工され、消費者が判別できない状態になって日本に入ってくることになる。

日本でもこれまでGM技術に関しては、イネを中心にさまざまな研究機関で実験が行われてきた。しかし「環境から隔絶した閉鎖状態で行われなければならない」というカルタヘナ法※2に違反する例も多く、ずさんな管理体制が問題視されている。管理の不十分さから、一度自然界へ放たれた遺伝子を、元に戻すことは不可能だ。汚染事故が起きれば、生態系に影響が出たり、食の安全性を脅かす事態につながっていく。

問われる安全性

昨年5月にはAAEM（米国環境医学会）がGM食品の即時停止を求める公式見解を示した。免疫システムや生殖・出産、解毒臓器（肝臓・腎臓）を障害することが動物実験で示され、特に３～４世代後の子孫が減少したり、ひ弱になることが明らかになっている。

すべての生物は出発点ともいえる原生種のまま生命をつないできた。その遺伝子を操作することは、生命の出発点を失い、生物そのものを全滅させる可能性をはらんでいる。知らないうちに私たちの身のまわりに押し寄せ、生物多様性と食の安全を脅かしているGM食品。さまざまな生物多様性への悪影響が指摘され、環境への影響や食品としての安全性に不安を持つ声は世界中に広がっている。

GM食品の流通を即時停止し、安全性を全面的に見直す時期にきている。

※1 宮崎大学でのGM綿栽培実験に反対する活動のため、昨年10月に設立。２００８年に綾町で開催されたGMOフリーゾーン全国集会の実行委員会を母体に、綾町、JA綾町、グリーンコープ産直生産者の綾豚会、綾菜会とグリーンコープ生協みやざきで構成されている。宮崎県内でGM作物を栽培しない、させないことをめざす

※2 遺伝子組み換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律

宮崎大学のGM綿は白い網室の中で育っていた

２０１０年８月、宮崎大学ではじまったGM綿実験栽培は、宮崎大学とGM作物の開発・種子販売をしているドイツのバイエル・クロップサイエンス社の共同研究で、GM綿とnon－GM綿を比較しながら生物多様性への影響等を評価しようというもの。栽培されているGM綿は、除草剤耐性と殺虫性の二つの性質を併せ持つもので、バイエル社が開発したものだ。２０１０年５月に申請が出されたこの実験栽培は２０１２年５月まで続けられる予定。７月には住民説明会も開かれたが、参加者は少なく、呼びかけのチラシも付近のごく一部の世帯に配られるにとどまった。実験が行われている圃場はキャンパスの最も奥にあり、周囲を山に囲まれ、約２ｍのフェンスの中は関係者以外立入禁止になっていた。目の細かな白い網の中のGM綿は、１．５ｍほどに育ち、中には白い綿毛をつけているものもあった。主に熱帯地方で栽培され、日本ではほとんど栽培されていない綿を、なぜ実験栽培するのだろうか。さらには、宮崎大学が開発したものではないバイエル社のGM綿をなぜ実験栽培するのか。もし汚染事故が起きれば、生態系に影響が出て、食の安全性を脅かすことになるのは必至だ。

フェンスに囲まれた宮崎大学GM綿実験圃場。

天笠さんの解説で実験圃場を見学する